貫井の風

令和３年度　２月号

ＮＯ．１１

練馬区立貫井中学校　学校だより

「衆知を集める」

校長　桐野　和之

皆さんは、松下幸之助という人を知っているでしょうか。この人を知っている人は少ないかもしれませんが、「パナソニック」を知っている人は多いのではないでしょうか。テレビや冷蔵庫、エアコンや洗濯機、そして携帯電話など、たくさんの電化製品をつくっている日本を代表する世界的な大企業です。

松下幸之助は、そのパナソニックの創業者です。松下幸之助は、１８９４（明治２７）年に和歌山県で生まれました。幸之助が４歳の時、父親が事業に失敗し、土地と家の財産を失ってしまいました。家の経済が苦しくなったので、幸之助は小学校を４年でやめて、家族とも離れてたった一人で大阪に奉公に出ました。

「奉公」というのは、お店などに住み込んでお店の手伝いや仕事をする事です。幸之助は体も弱く、奉公の仕事は小さい子どもには大変厳しいものでした。しかし、一生懸命に仕事に励み、他の人よりも早く仕事を覚え、技術を身につけました。そうした努力の甲斐あって、幸之助は１９１８（大正７）年、２３歳の時に、大阪市で「松下電気器具製作所」という小さな自分の工場をつくって独立しました。この小さな工場こそが、後に世界的企業となる「パナソニックグループ」の始まりだったのです。

松下幸之助は、この小さな会社を一代で大企業に育て上げたのですが、どうしてそんな大きな仕事ができたのでしょうか。皆さんも不思議に思いませんか。幸之助は小学校を四年生でやめてから学校で学んでいないのです。もちろん中学校にも行っていません。しかも身体も丈夫とは言えませんでした。ですから、小さい頃から苦労を重ねてきたのです。いったい、幸之助は会社を経営する事をどこで学んだのでしょうか。

幸之助は学校で学べなかったことを仕事の中で学んだのです。仕事をしながら会社を経営することを学び、その能力を身につけたのです。幸之助は、９１歳の時に、これまで一番うれしかったことは何かと問われて、奉公を始めて半月ばかり経った頃、店の主人から初めてもらった五銭白銅貨のことを話したそうです。このように幸之助は、苦労の中に喜びを見つけ学ぶ人でした。その幸之助の言葉に「衆知を集める」という言葉があります。「一人より二人、二人より三人、できるだけ多くの人から、できるだけ多くの話を聞こう。」と幸之助はいっています。私たちはついつい自分の意見が一番いいと思ったり、他の人の考えより自分の考えの方が正しいと思ったりしがちです。自分の意見や考えに自信をもつことは良いことですが、友だちの意見や考えを聞かずに自分の考えを押し通すのは間違っています。幸之助は独りよがりな自分だけの考えで商売すると、お店は繁盛しないし、お客様はそんなお店には来なくなると考えました。

私たちは授業中に、グループで話し合ったり、席の近い人同士で話をして考えや意見を交換して学習を深めることがあります。これは、正しく「衆知を集め」て、より良い考えや学びをしようとしているのです。班やクラスで話し合う時も同じです。一人より二人、二人より三人、できるだけ多くの人から、できるだけ多くの話を聞くことで、より良い考えが導き出されたり、より豊かな学びに結びついたりします。いろいろな人の話に耳を傾け、少しずつ自分で消化しながら、必要なことを学んでいくことが生きた学習と言えるのではないでしょうか。

先生の中学生時代の思い出

主任教諭

私は電車を利用して、貫井中と同じ中村橋駅で下車し、通学していました。中学校に入学して最初の定期試験では、クラス４３人中３７番。余裕だと思って、卒業した小学校の運動会を見に行き、全く勉強しませんでした。そのとき、「これは勉強しないとまずい！自分は勉強しないとダメなんだな～」と気づきました。

中学３年間はとにかく部活動に夢中でした。入部しようと思っていたテニス部の先輩は、後輩が入部するとテニスコートを利用する時間が短くなるため、体験入部のときにとても感じが悪かった。だから、小さいときから続けていた水泳部に入部することとした。温水プールがあるため、一年中プールは使用できる環境。

しかし、水泳部は水球部だった。毎日のように練習はあり、土日のどちらかは一日練習で、試合がある日も多々あった。夏休みなどの長期休みは、合宿があった。練習はきつかったが、達成感はあった。でも部活動に行きたくない日もあり、６時間目の授業後、トイレにこもり、「頑張ろう！」と自分に言い聞かせ、部活動に行くこともあった。

私の学年は、１１人。スタメンになれるのは、７人。マネージャーが２人だったので、２人はスタメン落ち。私は、中２のときにスタメン落ち。これは、自分たちの投票で決める。それがとても悔しくて、その後一度も練習を休むことなく、とにかくスタメンになれるように頑張った。

中３のときは、みごとスタメンになれ、全国大会にも出場した。今思えばなんであんなに夢中にやっていたのか疑問に思うが、中学生だから出来たことだと思う。

主任教諭

中学時代の（今も？）白石洋平は面倒くさくてクソ生意気で反抗的で嫌な奴だったと思います。学級担任なんかぜったいしたくありません。

部活動は，バレーボールやソフトテニスも検討しましたが，球技がまったくダメで，顧問の先生も愛のムチたる制裁をお加えになる先生方でした（当時ですよ！）ので，ビビッて逃げ，結局小学校の頃からスイミングに通わせてもらっていたこともあり，友達も入部するという安易で不純な動機で水泳部に入部しました。

１年の夏前，野球部の顧問をしていたコワい担任の先生に呼び出され，生徒会役員か学級委員をやれと言われ，よく考えもせず，生徒会本部役員選挙に立候補しました。生徒会担当の先生はコワくて逃げたはずの男子バレーボール部顧問の先生（練馬区内にいらっしゃるようです…）で，愛のムチたる制裁こそないものの，何か遅かったりミスしたりすると，生徒会室でトレーニングをさせていただいていたように記憶しています。

２年になるとき，水泳部顧問先生が異動され，学年主任の先生（やはり練馬区内にいらっしゃりこの前感動の再会を果たしました！）が，卒業まで面倒をみてくれることになりました。水泳の事故は命に関わることもあり後輩はもてませんでした。

生徒会役員としての一大イベントは春の運動会で花火を打ち上げることで，高所恐怖症の人間にとっては悲惨な仕事でしたが，なんとかやり遂げました。先輩も前線を退かれ，部活動も自分たちの代になりました。顧問を引き受けてくれた学年主任の先生の「あんた部長くらいやりなさいよ。」のお言葉に部長をおおせつかりました。学級委員がやりたくて，生徒会本部役員選挙には立候補しなかったのに学級内の選挙で負けて，運動

がまったくダメなのに体育委員になりました。生徒総会で炎上したことを記憶しています。冬にはスキー移動教室があり，小さな頃からスキーに連れて行ってもらっていたこともあり，ちょっとカッコよく滑ったら，雪上には魔法が起こるもので，淡い恋がスタートしました。

３年の修学旅行では夜中まで起きていようぜと言って１番に寝て呆れられました。水泳部では記録より記憶だというカッコいいと思い込んだスローガンのもと,記録が遅い仲間もなんとかリレー選手として組み込み全員で都大会に出場しました。合唱コンクールでは１年生の時の３年生が歌っていた「IN TERAA PAX」と「大きな古時計」両方を歌いたくて，担任だった音楽の先生に頼み込んで，課題曲を「大地讃頌」から「IN TERRA PAX」に変えてもらいました。

ただ思い出をつづっただけですが，友だちにも先生方にも恵まれ，なんやかんや楽しい中学校生活を過ごさせてもらい，学校好きだったんだなぁと思います。ちなみに中学校３年間，数学の成績は３。当時の将来の夢はまだ学校の先生ではなく偉い学者さんです。どんなふうに学校の先生をめざすことになったのかは，またいつか……。最後までお読みいただきありがとうございました。

新聞記事より

朝日新聞天声人語２０２２.1.１５

＜文化祭二年連続オンライン慣らされていくこの空気感＞高２石川胡桃。

新年に東洋大学から届く「現代学生百人一首」の入選作である。今年はコロナ下２年目ならではの実感を詠んだ秀作が多い

▼＜家の中授業を受ける弟の背後を通る私は忍者＞高２小塚萌愛。

授業も会議もオンラインが日常化し、家族の心がけは、映り込まず、音を立てず、部屋の乱れは断じて見せない。

＜リモートで授業はじまり映る部屋勉強よりもそうじ頑張る＞高１黒木薫里

▼あんなに打ち込んだ部活動の成果を披露する場が消えて、やり切れない。

＜ピカピカに磨いたフルート出番なく涙にぬれたコロナ禍の夏＞

高１武田衣未。かくも長き巣ごもりに気持ちは沈みがち。

＜『外出自粛』自粛疲れのストレスを戦闘ゲームにぶつける私＞中１星夏穂

▼コロナ禍は家族の距離も遠ざけてしまう。

＜二回目のワクチン接種終わったよ単身赴任の父への切符＞高３田代桃。

＜次はいつ会えるのかしらと泣く祖母の手も握れずにガラスと会話＞

高２大場美言。病院や施設では面会すらままならない

▼＜視線落ち口にはマスク会話なく耳にはイヤホンまるで三猿＞高１永井滉子。

見ざる言わざる聞かざるの毎日。とりわけもどかしいのはマスクだ。

＜十年後再会しても気づくかなマスク顔しか知らない友達＞高２上山愛裕

▼＜アクリル板マスク消毒ディスタンス慣れたくなかったこんな生活＞

高２樋口壱之介。世界に老若男女７８億人、だれも慣れたくなかったこんな生活。

新型コロナウィルス感染予防

新型コロナウィルスの変異株、オミクロン株の脅威が日本列島を覆っています。東京都内の１日の感染者数が２万人を超える日が続くこともありました。

いつ、どこで、誰が感染しても決して不思議ではない状況です。学校では現在、出来得る限りの感染予防対策を取り感染予防を行っています。

健康観察の継続、換気、手洗い、手指消毒、音楽の授業や給食では生徒の机上に飛沫防止ガードを設置、活用しています。さらには用務のスタッフさんたちには毎日、手すり、取っ手等の消毒をしっかり行ってもらっています。そして現在は皆さんが待望している部活動も残念ながら中断をしています。今の感染状況下、教室の換気をしっかりと行うため、空調による暖房とともに、教室の上窓などをしっかりと開けて、換気状態を常に保つようにしています。そのため教室内の室温が低下しやすく寒いので、いつもの冬とは違い、コート等の防寒着を授業中でも生徒が着用することを確認し実行しています。教室には手指消毒用のアルコールが各班に１つ分の計算で置かれています。これはどんどん使用してください。まだ予備はたくさんあります。

とにかく今は、できる予防対策はしっかりと地道にやっていくしかないです。それが確かな感染予防に結びついていくと思います。ですから、生徒の皆さんは、休みの日の過ごし方を含め、人混みには行かないなどの自分を守る習慣をしっかりと身に付けてください。さらに部活動等が中断している今は顧問の先生方から伝達されている指示等をしっかりと聞き、来るべき時にしっかりと備えてください。明けない冬がないのと同じで、コロナ禍もいつかは必ず止むはずです。その時をじっくりと待ちましょう。

いよいよ受験本番

２月１０日(木)から東京都内の私立高校、そして２月２１日(月)は都立高校の１次、分割前期試験となりいよいよ受験は本格化します。

現在のコロナ禍の中、３年生にとっては大変困難な時期を迎えています。感染対策をしっかりと行うとともに、受験勉強も確実に進めてください。

体調管理、不測の事態への対応を含めて自ら進んで主体的に準備を丁寧に行うようにしてください。

さて、この私立高校受験において２５年ぐらいの前の出来事ですが、忘れられないことがあります。私が受け持っていた女子生徒が併願受験である女子高校を受験した際の話です。

その子は当時併願推薦と称されていた制度を利用して受験をしました。確約ではないがほぼ合格が約束されていた制度です。

合格発表の日になかなか学校に戻ってきませんでした。担任としてはどうしたんだろうと不安な気持ちが漂い始めていました。

結果は不合格。該当校の入試担当者と連絡を取ってみると普段取ったこともない点数を数学で取っていました。その点数ではその私立高校の入学選抜会議を合格で通すことができず、残念ながら不合格となったのです。本人に話を聴いてみると、数学のある問題で途中躓いてしまい、他の解答可能な問題を解く時間を失ってしまったということでした。

生徒本人はもちろん悔やみました。なぜなら他にはできる問題がたくさんあったのに、ちょっと躓いた問題に「夢中になってしまった」と話してくれました。

３年生の皆さん、実力があっても述べた事例のようなことは受験では起きることがあります。入試問題は解答が確実にできる問題から済ませ、そして少し難しいなと思った問題は後に回すぐらいの余裕は持ってください。そうでなければ、せっかくできる問題も解答せず終わってしまうことがあるかも知れません。

明日からの私立高校一般入試に向けてどうか全力を出せるよう頑張ってください。